笑い日和。

大野さいころ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
笑い日和。

【Ｎコード】
Ｎ１８５６ＢＡ

【作者名】
大野さいころ

【あらすじ】
剣も魔法もバトルもないが、幼馴染あり駄妹ありハーレムありの学園コメディ。力を抜いて読んでいただきたいです。
たまにショートストーリーも投稿します。
投稿は不定期です。

#1　いつもの風景。（前書き）

はじめまして。大野さいころと申します。
到着地点を見つけないまま出発してしまったので道に迷うかも知れませんが、
どうか温かい目で見守っていただければ嬉しく思います。

#1　いつもの風景。

気がつくと見たこともない場所にいた。

……なんてことはまったくなかった。
ここは２－Ｂ、つまり俺―大藤功≪こう≫―がつい先日、四月の頭からいるクラス。
そういえば授業中だったっけ？
まぁ少しうとうとしてしまうのはおそらく学生なら誰しも経験があることだし、特に気にしないで教科書とノートの確認をしようとしたところであることに気がついた。
静かすぎるのだ。
いや、授業風景としてはこれ以上ないくらい正しい状況だけど。
このクラスに限っては静かすぎることは異常なのだ。
普段はあまり真面目な生徒がいないのかコソコソ話したりゴソゴソ何かしている音がするのがこのクラス。
授業なんて真面目に受けるのは真面目な委員長とその他少数だ。
周りにクラスメイトがいるから寝てる間に教室移動があったわけでも、皆が急に真面目になったわけでももちろんないだろう。
俺が一人疑問に思っていると、後ろから背中をシャーペンで小突かれた。

伊藤恵≪めぐみ≫。クラスメイトであり、俺の親友でもある女子。
恵とは去年知り合い、どうしてだったかわからないが意気投合して

仲良くなり現在にいたる。
現在席は俺の後ろで、授業中もよく今みたいに背中を小突かれるのでいつもなら特に驚いたり声を上げたりはしない。

そう、いつもならである。

「痛いわ！！」

授業中ということを忘れて反射的に振り向きながら恵に怒鳴った。
いつもなら芯はしまって小突いてくるのに今日は思いっきり出てるようだ。
背中にチクっとした痛みがまだ残ってる。しかもなんか一か所じゃなく全体的にチクチクしてるんだけど…
というか、背中に刺さったってことは…

「ワイシャツ貫通してるじゃねーか！！恵、なんで今日は芯―」

しまってないんだよ、と俺が続けようとしたら恵に

「（前！前！）」

とジェスチャー付き口ぱくで伝えてきた。
なんだろう？と思い、その仕草が馬鹿みたいだなーと場違いなことを考えながら前を向くと

「モンスターがいた」

モンスターがいた。なぜか青筋をたててるし。
後ろで恵が「思ったこと口に出しちゃってるし…」とか言ってるが
何の事だかわからない。
このモンスターは分類では人間で、国語教師の通称『体育』。
文系の教師のくせに筋骨隆々で見た目は完全に体育会系。
ちなみに中身も体育会系。
怒らせるとかなり怖いと評判の先生だ。
ちなみに顔も怖い。
ここまで考えて―めちゃくちゃ失礼なことを―やっと理解した。
このクラスが異様に静かで、恵が俺に何を伝えたかったのかを。
そこまでわかって嫌な汗がだらだら出てきた…。
そしてモンスターが動きを見せようとした時、

「殺さないで下さい！！」

おもいっきり叫んだ。命がかかっているんだ。恥がどうのこうの言
ってられない。

しかし後ろのほうで笑ってるやつはちゃんとあとで制裁しよう。
俺が生きていればだが…

「誰が殺すか！お前は俺をなんだと思っているんだ！」

「えっと…。やさしい国語教師だと思っています」

「さっきモンスターって言っておいて、よくそんなことが言えるな！」

「心を読まれていた！？」

「口に出して言ってたわ！…まぁいい。何か言い訳とかはあるか？一応あるなら聞いてやろう。」

「なぜ体育の教師にならなかったんですか？」

「余計な御世話だ！廊下に立ってろ！！」

笑い声が聞こえる中、すごすごと廊下に出ていく俺。
廊下に立ってるだけにどんな意味があるのかを誰かに聞きたかったが、そんな仲間は授業中の廊下には誰もいなかった。

ただ立っているだけの、暇な間少し考える。
俺が通ってるこの学園は『私立国際学園高等部』。
国際とつくだけあって、二年生のクラスには毎年五月の中頃から留学生が来る。
どのクラスに来るのかはわからないが、面白いやつだとうれしい。
ちなみにクラスは２－Ｂ。Ａ～Ｅまでクラスがあり、一クラス４０人程度の普通規模の学園だ。

また、すぐ近くに『私立国際学園中等部』があり、俺は一昨年までそこに通っていた。
ちなみに中学には現在俺の妹が通っている。
きっと再来年には妹もこの高校に上がってくるだろう。
高等部には受験なしで来れるありがたいシステムがあったので、中学からの顔見知りもかなり多い。
もちろん外部から受験してくる生徒もいる。そういう生徒はやはり、留学制度などに興味があるのだろうか。
ちなみに俺は留学なんぞに興味はない。ここに来たのも受験なしという甘美な響きに誘われたからだ。
しかしそんな俺でも今ではこの学園をかなり気に入ってる。
というのも、不良がいないからだ。
不真面目な生徒はいるが、不良はいない。
ちなみに今住んでるこの町自体治安がかなり良い。
そんな環境を俺はかなり気に入っている。
荒波立てず、平穏でそれなりに楽しい生活ができてる今を大切にしたいと思っている。
これからも仲の良い友達と、楽しい時間を過ごしたい。

キーンコーンカーンコォーン…

チャイムが学校中に鳴り響く。
授業が終わり、廊下にもいろいろなクラスの活動音が聞こえてくる。
俺はさっそくいつものメンバーに混ざるために、教室に入ろうとしたが

またもやモンスターに出くわした。

よく考えれば当然だ。
モンスターに追い出され、教卓側のドアから入ろうとすればモンス

ターに会うのは必然だった。
しかし、さっきまで悦に入って自分の考えに浸っていたのですっかり忘れていたのだ。

「大藤、これから一緒に昼休みを過ごそうか。反省文ならおごってやるから」

「ありがとうございます。けど遠慮し」

「遠慮なんかするな。」

「いえ、遠慮」

「するな」

「はい…」

強制だった。笑顔が不気味すぎて怖かった。
こうして俺は昼休みを失ってまでモンスターと過ごすことになってしまった。
教室からニヤニヤと見てくる悪友らを恨めしく思いながら、反省文を食べに行くのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1856ba/

笑い日和。

2012年1月4日19時53分発行